

私のプロジェクト X

住 友 寛

1. はじめに

今年の 3 月で還暦を迎え節目となる年に投稿依頼を戴きたいへん光栄に思います。

私が農業土木の道を歩むことになったのはほんの偶然でしたが、今となっては必然とも思えるような出来事の連続であり、そのあたりを中心にこれまでの技術者人生を振り返ってみたいと思います。

1955 年に札幌市で生まれ、一歳半を過ぎた頃に父親の転勤で帯広市に移り、小学校入学の直前に札幌に戻りました。小学校から高校卒業までのほとんどを札幌で過ごし(小学校 3 年から 5 年にかけての約 2 年間は千歳市に居住)、大学進学のためまた帯広市に向かいました。

高校時代、将来何になるのかなどとは深く考えずに、幼少期に暮らした帯広・十勝への想いと、ただ何となく農業や酪農への憧れから帯広畜産大学を受験し、第二希望の農業工学科に滑り込みました。



入学後はクラブ活動(アイスホッケー部)とアルバイトに明け暮れ、5 年がかりでやっとの思いで卒業しましたが、当時、農業工学科主任教官で私の卒論を指導して下さった古谷将教授(故人)に、結婚式の来賓挨拶で「学生時代はアイスホッケーばかりやっ

ていて研究室にはほとんど顔を見せたことがなかった」と暴露されてしまったほど、勉強したという実感がほとんどない学生生活を送りました。

当時の農業工学科には四つの研究室があり、農業土木研究室以外の三つは農業機械の研究室でした。

当初、高校の大先輩が教授を務めていた畜産機械研究室に進むつもりでしたが、学生寮の先輩からの「就職は機械より土木のほうがいいぞ」というアドバイスに従い、ほとんど何も考えずに農業土木の道を選択したというのが実態です。

2. 農業土木技術者としてのスタート

こんないい加減な学生でしたから、5 年目の冬に就職が決まった(拾って戴いた)北海道土地改良事業団体連合会(土地連)でも即戦力にならないと思われたのでしょうか、すぐに出向職員として空知支庁南部耕地出張所(当時)へ農業土木工事の補助監督員として 2 年間修業に行かされました。

ここでは、昭和 53 年 4 月から 55 年 3 月までの間、南幌町、長沼町、栗沢町(現岩見沢市)の用水路・排水路・揚水機場・排水機場など「かんがい排水施設」の施工管理を担当しましたが、ここで農業土木のイロハを学ばせて戴くことができ、当時お世話になった皆様には今でも感謝しております。

空知支庁南部耕地出張所での 2 年間の修業を経て、昭和 55 年 4 月から昭和 58 年 3 月までの 3 年間、留萌管内小平町にあった留萌支庁防災ダム建設事務所(当時)に補助監督員として派遣されました。

この事務所では、当時、留萌市・小平町・苫前町で建設を進めていた 4 箇所の防災ダムを一括管理していましたが、そのうちの沖内ダム(小平町)の施工管理を主に担当し、堤体盛土のための現場盛土試験や盛土材料の室内土質試験などに携わりました。

沖内ダムは、堤高：29.60m、堤長：157m、堤体積：235,100m³、有効貯水量：1,189,000m³

の中心遮水ゾーン型フィルダムで、防災機能とかがんがい用水機能を併せ持つ多目的ダムとして昭和 52 年に工事が始まり平成 7 年に供用開始されました。私が赴任した昭和 55 年春の時点では、まだ仮排水トンネルと仮締切堤及び取水塔だけが施工されているのみでした。



ところで、平成 6 年 3 月、39 歳の時に技術士第二次試験に合格し(農業部門農業土木)、同年 6 月に科学技術庁(当時)に技術士登録してから今年で丸 21 年となりましたが、そもそも私が技術士を目指すきっかけとなったのは、防災ダム建設事務所時代の 3 年間に、様々なことを勉強し体験させて戴いたことでした。

その中でも最も大きな出来事は、昭和 56 年 8 月上旬の記録的な集中豪雨で石狩川や千歳川が氾濫し、後に千歳川放水路計画の発端にもなったいわゆる「56 災害」で、留萌管内の小中河川にも少なからず被害をもたらしました。

とりわけ沖内ダムは、沖内川上流からの鉄砲水とともに流れて来た流木がダムの仮排水路トンネル呑口を塞いでしまい、行き場を失った氾濫水が仮締切堤を乗り越えて本堤施工前の掘削敷とグラウト工を完全に水没させてしまうという、未曾有の工事中災害が起きてしまいました。さらに氾濫水は下流の工事用道路を決壊させて、一時はダムまでの通行が不能となるという大きな災害となりました。

この工事中災害は、当時それこそ「想定を超える

ような災害」としか言いようがないものでしたが、現場の技術者としては、日頃からそのようなことを想定し対策を講じる必要があったことを思い知らされた出来事でした。

幸い、人的被害や家屋の被害ではなく、工事現場と工事用道路の被害のみで治まったため秋には工事再開となりましたが、私はあの災害を通して、自然の恐ろしさをまざまざと体感するとともに、防災ダム建設の必要性を実感しました。

この災害を経験し、自分が携わっている仕事が農業ばかりではなく、地域社会にとっても非常に重要な仕事であることを実感し、それまでフラフラとしていた気持ちが、この世界で生きて行こう、という強い思いに変わりました。

同時に、自分の技術力や現場管理能力を向上させる必要性を痛感し、それがひいては技術士資格の取得に繋がったと思います。

3. 農業土木から農業農村工学へ

防災ダム建設事務所での修業を終えてからの 20 代後半から 50 代前半にかけての約 25 年間、土地改良事業(農業農村整備事業)における調査・計画・設計・施工管理・試験・研究・企画・立案など、広く浅くではありますが、農業土木に関するありとあらゆる業務に携わり北海道全域をほぼ隈なく走り回りました。

田畑の整備や用排水路・農道などの調査・設計といった本来の農業土木技術ばかりでなく、農村公園やコミュニティ施設の計画、グリーンツーリズムの調査・立案、自然・再生エネルギーなどの地域資源活用といった農村振興に関わる計画、また、圃場の土壌・土層・水質・排水性の改良といった農地環境の保全などにも関わったことは、自分の技術の幅を広げるという意味でたいへん貴重な経験となりました。

折しも、農業土木学会が農業農村工学会と名称が変更になった頃と重なり、農業土木技術が農村地域全体の振興計画を策定する技術体系へと発展していく途上にあった頃で、今振り返ると、技術者として最も充実していた時期だったと思います。

この時期に関わった業務の中で特に思い出に残るものの一つとして、30 代前半から 40 代前半の約 10 年間、十勝管内と網走管内の大規模畑作地帯における「排水改良」「土壌改良」「土層改良」の基準改定に伴う調査・試験・研究が上げられます。

十勝支庁・網走支庁(当時)からの発注で試験圃場をいくつも設置し、一圃場につき 3 年間から 5 年間ほどかけて現場試験・室内試験・生育収量調査・聴き取り調査などを実施し、その結果を農業農村工学会の報文集や研究発表会などにも発表し、最終的には北海道独自の技術指針としてまとめ上げる仕事に携わりました。



この仕事は私の技術士試験のテーマにもなりましたが、業務遂行の過程で、北海道大学農学部農業工学科、帯広畜産大学農業工学科、北海道立中央農業試験場農業土木研究室等(いずれも当時)の諸先生に多大なるご指導・ご協力を賜り、今振り返れば、北海道における農業土木分野の粋を集めた大プロジェクト事業だったと思います。

この仕事がきっかけで、41 歳の時に土地連を退職して帯広市に本社のある(株)ズコーシャに転職し、同時に、帯広畜産大学大学院の社会人特別選抜コースで「北海道の大規模畑作地帯における排水改良と土層改良」をテーマに 2 年間、知見を深める機会を得ることができました。

社会人大学院を修了してからは、(株)ズコーシャで建設コンサルタント業務に専念しましたが、業務

の幅はさらに広がり、北海学園大学工学部との連携で、積雪寒冷地における道路の凍結・凍上対策に関わるなど、一般土木の分野にも携わりました。

もっとも、基本的には農業農村工学が主たる業務で、道北のサロベツ地域における地域振興計画策定や道東の釧路北部地域の中山間広域連携業務などのプロジェクト事業は、特に印象に残っています。

また、千歳川放水路計画の撤回に伴う代替振興計画策定や、北海幹線水路の維持管理規定策定、穂別ダムの機能保全計画策定など、比較的大きな事業の計画策定を手掛けることが多くなりました。

その中でも、現在の業務に繋がったという意味で、開発局の発注による「北海道における新たなライフスタイルの提案に関する調査業務」は、特に印象に残っています。インターネットで事業のホームページを立ち上げ、北海道以外に居住する人達を対象にして夏期の道内に 1 ～ 2 週間滞在し、こちらが策定した体験プログラムやアンケートに協力してもらうことを条件に、滞在費用の一部を補助するプロジェクトへの参加を公募しました。

その結果、東京、神奈川、千葉、静岡、名古屋、大阪、アメリカなどから応募があり、10 数組が伊達市、滝川市、下川町に分れてそれぞれのプログラムに参加しましたが、北海道で暮らしたいという道外や海外の人達の問題点や課題が浮き彫りとなり、移住政策を掲げていた伊達市、滝川市、下川町にとっては貴重な調査結果になったようです。

私にとっても、それまで道外や海外の一般市民の方々と業務で関わる事がなかったため、「目からうろこが落ちた」と言えるような、たいへん貴重で有意義な体験となりました。

4. 新たなプロジェクトの立ち上げ

50 代の半ばに差し掛かろうという時期でしたが、(株)ズコーシャを退職し、技術士で(株)東洋コンサルタント代表取締役社長の小林幸男氏、北広島市農業委員で(有)タカシマファーム代表の高嶋浩一氏、中小企業診断士の田口幸男氏の 4 人で(株)都市田園協働ファームを立ち上げました。

北海道産の新鮮で安全、美味しい農畜産物を札幌

圏や首都圏のお客様に産地直送することを目的とし、平成 21 年から業務を開始しました。最初の 2 年間は事務所での野菜やお米の直売が中心でしたが、3 年目からは量販店やネットショップなどでの販売を手掛けて少しずつ販路を広げ、現在に至っています。

主力商品は道産ブランド米「タカシマオリジナル ゆめぴりか」で、札幌市内の飲食業者や一般家庭への直接販売のみならず、首都圏の有名デパートや大手量販店のネットショップにも採用されました。



また、地物野菜などはコープさっぽろ「ご近所野菜コーナー」で直接販売できるようになり、さらに、釧路管内白糠町のイタリアンチーズ製造業者「白糠酪恵舎」と共同開発した「宮の森アイス」は、どさんこプラザ札幌店・有楽町店、ダイエー札幌円山店(マルヤマクラス)、北雄ラッキー山の手店の 4 店舗で販売させて戴いています。

弊社の商品コンセプトは、「地産地消」、「産地直送」、「減農薬・減化学肥料」、「安心・安全・新鮮・良食味」、「医食同源」などですが、お客様のニーズはまさに「そこ」にあることを日々実感しています。

ところで、大学時代の同期生でもある高嶋浩一氏が経営するタカシマファームは、千歳川と国道 274 号線が交差する橋の北広島市側にあり千歳川の氾濫原に位置しています。入植後 120 年近く経ち、昔は洪水常襲地帯で土質も排水性も劣悪でしたが、長年にわたる土地改良事業(圃場整備・暗渠排水・排水

路整備)の実施と、自力での土壌改良(有機質資材投入・自家製堆肥散布)などによって、今では道内でも有数のブランド米生産農家になりました。



北海道産米の生産量や品質がここまで伸びたのには、確かに品種改良や肥料・農薬、農業機械などの力は大きいですが、基盤となる農地の改良(農業土木技術)がなければ、それらの効果を有効に発現させることはできません。そのような意味から農業土木技術を人の健康に例えると、「体の様々な器官を維持・増進させるための総合医療的な役割を担う技術」と言えるかもしれません。

農業土木に関わってから大学時代も含め 40 年余り、これまで様々な仕事を通してたくさんの方々との出会いがあり(中には運命的な出会いもあり)、それらの方々からのご指導・ご協力のもとでなんとかここまでやってこれたことを、この場をお借りし感謝申し上げます。

私のプロジェクト X はまだまだ続きます。多分、生きている間、農業に関わっていくことでしょう。

以上

住 友 寛(すみとも ひろし)

技術士(農業/総合技術監理部門)

(株)都市田園協働ファーム 代表取締役

